

# 留学生の「道教え談話」にみる表現

二階堂 整

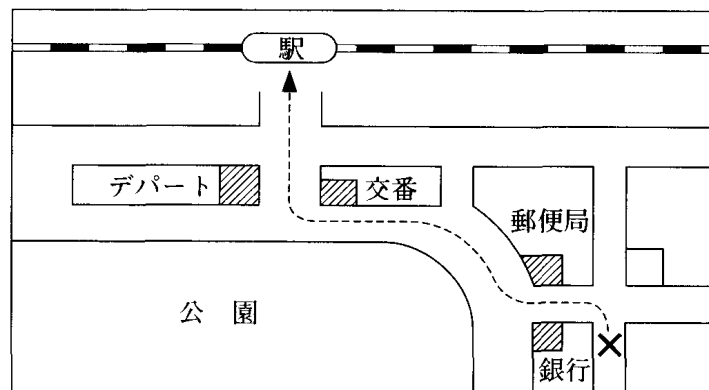
## 1. はじめに

筆者は、今までに、各地の方言の地域差・世代差の研究のため、共同研究の中で「道教え談話」（後述）を収録してきた。今回は、その談話調査を留学生に対して実施した。日本人の調査結果と比較することで、留学生の話す日本語の特徴と日本語教育の影響を明らかにしていきたい。どういった誤りが出やすいか、誤りではないものの日本人は使用しないような表現がないか、さらに日本語教育による共通語の特徴が出てこないか等を調査目的とする。

## 2. 調査概要と日本人の談話資料

道教えとは、地図（下図参照）を見ながら駅までの道順を教えるという調査のことである。同一話者に親友など親しい人に教える場合（くだけた場面。以下、「親」とする）と見知らぬ人に教える場合（改まった場面。以下、「疎」とする）の談話を収録したものである。

まず、比較の対象となる日本人の資料について説明



する。

科研報告書（参考文献 二階堂2003）では、大阪・東京・高知・名古屋・広島・福岡で得られた道教え資料から、内容・録音状態のいいものを選抜、これらの談話資料を音声も聞けるよう CD-ROM 化した。内容は、福岡 4 名（60代男 1，70代女 1，20代男 1 女 1）・広島 5 名（70代男 1，40代男 1，30代女 1，10代女 2）・高知 4 名（70代男 1，60代女 1，10代男 1 女 1）・大阪 5 名（60代男 1，40代女 2，20代男 1 女 1）・名古屋 4 名（60代女 1，50代男 1，20代男 1 女 1）・東京 4 名（60代男 1，60代女 1，20代男 1 女 1）の 6 地点、合計 26 名の道教え談話を収録してある。今回はこれらの談話資料と、CD-ROM に収録しきれなかった福岡の談話資料（二階堂2003に福岡の全文字化資料記載）も対象にする。

福岡では、2001年の9月の時期を中心に、調査を実施した。話者条件は、福岡市及びその近郊（いわゆる筑前方言地域）の生まれ、育ち（対象地域内の移動は無視）の方（少なくとも片方の親は先の出身の条件）とした。その結果、道教え資料収録は45名の資料（録音不備による1名は除いた）が集まった。世代ごとに、少年層10代15名（男6女9）、若年層2，30代（社会人のみ）7名（男1女6）、中年層4，50代8名（男2女6）、老年層60代以上15名（男8女7）である。

今回は、福岡の全談話資料が十分な量があることと、留学生談話と福岡方言との対比を行うことから、福岡資料を比較の中心とする。

この道教え調査は同一の条件（地図使用）で調査し、話者も話しやすい方法であるため、より自然に近い談話資料が得られ、しかも枠組み・条件がはっきりしているため、各地点・各個人が比較しやすい特徴がある。ただし、道教えはその場で演じてもらうので、不自然な部分も出てこないわけではないが、逆に、癖や特徴（イタダクを繰り返し使用など）がでてくる面もある。留学生の日本語を検討する場合にも、日本人や他の留学生と比較しやすいという利点があることになる。

### 3. 留学生の調査概要

留学生は福岡女学院大学の学生15名を対象とした。2003年の秋口に調査。4年2名，3年1名，1年12名。4年1名の韓国からの留学生を除き，他すべては中国からの留学生である（末尾談話資料参照）。本学の場合，入学資格として，日本語能力検定1級程度の実力をそなえていることが条件となる。本学留学生は，本学受験の2年前に福岡の日本語学校に入学，日本語を学び，実力をつけるという道をたどることがほとんどである。また来日前に，2年から数年，本国にて日本語教育を受けている。よって，本調査時までに福岡で最低3年は過ごしていることとなる。今回の調査人数は少ないが，言語環境がよく似ており，後でもふれるが，福岡方言とのかかわりをみるためにも適当な条件をそなえていると考えられる。

調査は研究室で実施した。まず，来日前をふくめ，日本語学習歴をアンケート調査，福岡方言についても尋ねた。その後，道教えの調査を実施。最初に「疎」，次に「親」の順である。しかし，「親」の場合，「疎」と変わらないとの回答をするものも多く，一部実際おこなっても，言い間違いをのぞき，ほとんど変化がなかったので，「変わらない」と回答した場合は，「疎」の調査のみで終了した。

### 4. 日本人調査結果の概略

ここでは，福岡・広島・高知・大阪・名古屋・東京の比較を行い，共通点と相違点を簡単にまとめておく。

全体的共通点として，敬語使用，方言使用に関して30，40代に境がおけそうである。「親」の場面で地元の方言がよく出現する40代以上とそれほどでもない20代以下である。ただ，福岡の50代以降は，「疎」でも，結構，方言が出現するが，他地域はそれほどでもない。また，50代以降の福岡の世代では，レル・ラレル使用が目立つが，他地域はそれほどでもない。

10, 20代の「疎」の場面では、「じゃないですか」「してもらう」の表現が地域を問わず出現している。全国的な傾向と思われる。

東京は、当然のことながら、他地域に比べれば、「疎」の場面は教科書的な表現となっている。

各地の特徴は、道を曲がる部分の説明に現れる。今、例として、「右に曲が（ 1 ）、郵便局がある（ 2 ）」のそれぞれの（ ）に何が入るかで示せば、1・2の順に、

福岡（タラ）・（ケン） 広島（タラ）・（ケー） 高知（タラ）・（キー）  
大阪（タラ）・（カラ） 名古屋（ト）・（デ・ガネ・ワネ） 東京（ト）・  
（カラ）（ただし、実際は曲がッテ・・・曲がッテが数としては一番多い）  
という違いとして出てくる。

福岡のケンは方言と意識されつつも、若い世代でも使用される根強い方言、タラは方言と気づかずに全世代で使用される、いわゆる気づかない方言である。

## 5. 留学生調査結果

### 5.1 福岡方言

留学生15名に対し、「日本に方言があると知ったのは、いつ、どこか」、「福岡方言といえば、どんな言葉が思い浮かぶか」をアンケート調査した。

まず、方言の存在を知ったのは、本国の授業が4名、福岡の日本語学校の授業が2名、不明1名で他の8名はすべて来日後、福岡でのアルバイトという回答であった。

さらに福岡方言で記されたものを見ると、上記不明1名以外には、何かの記述があった。そのうち、11名には、打消しの「ン」（食べん、わからん等）がみられた。打消しの東日本方言・共通語の「ナイ」に対す西日本方言「ン」を多くの学生が福岡方言の例としてあげていることは、それだけ印象が強かったということであろう。日本語教育では、打消しは「ナイ」と教わるが、

来てみれば、福岡に限らず西日本では、普段、若年層でも「ン」を使用している。打消しという表現であるせいもあって、強く意識されたのであろう。

このように方言の存在を知るきっかけがアルバイトであったり、福岡方言といえ「ン」をあげることなどは、今後の日本語教育における方言教育の必要性を感じさせる点ではないだろうか。

その他には、「しチャリー」「食ベトー」「良カ」「何ショート」「わからんバイ」など、福岡で使用される方言があげられていた。

## 5.2 「親」「疎」の使い分け

今回の調査では、「親」「疎」をととても上手に使い分けをしている学生は見られなかった。留学生にとってなかなか使い分けることは困難なことであるかと思われる。「親」の場合も同じとする回答が多く、さらに調査した場合でも、「親」にも「デス」「マス」「クダサイ」を使用しており、そもそも使い分けの意識が充分あるのかさえ疑問になってくる。その中で、話者①・②の資料に注目したい。①・②は4年生で、1年生より日本語を学んだ経験も長く、「親」「疎」の使い分けが見られる。まず、「デス」「マス」「クダサイ」が「疎」の場面でしか使用されていない。次に、「親」の場合、上記の敬語使用をせず、文を「タラ」「テ」などでつないでいっている。また、「ネ」「ヨ」の使用が見られる。一見、上手に使い分けをしているようには見えないが、この形式は日本人の若年層の形式とほとんど変わらない。福岡の若年層では、中学生に調査したが、「疎」の場合、「デス」「マス」使用、「クダサイ」は全く使用なし。次に、「親」の場合、文を「タラ」「テ」などでつないでいて、最後を原因・理由の「ケン」でまとめている（例 右に曲がッタラ、駅があるケン）。結局、日本語を十分に使いこなせていないことでは、ある意味、中学生も留学生も同じであるため、似た形式になるのであろう。ただ、使いこなせていない点がやや異なり、留学生は日本語教育で敬語学習がなされているため、「クダサイ」が出現し、中学生は敬語がうまく使いこなせないため、それが出てこない。逆に、方言は留学生が使えず、中学生は方言使

用で「ケン」が出てくるのであろう。方言が使えない分、留学生は、「ネ」「ヨ」で「親」を示そうとしている。おもしろい点は「疎」の場合、中学生も①・②の留学生も、「テ」「タラ」でどんどん文をつないでいくため、1文が長くなることである。ここに、両者のこなれていない表現の共通性を見て取れるように思われる。

### 5.3 日本語教育と方言

もう少し、日本語教育と方言の問題を談話資料の中から見たい。日本人の西日本の調査では、「右に曲が（ ），銀行が見えるケン」のような表現では、括弧の中には、圧倒的に、タラが使用されていた。これは、気づかない方言の1例である。共通語・東京方言の場合は「ト」が使用される。今回の留学生調査では、まず予想として、日本語教育をうけていることから、「ト」の使用がみられると考えていたが、結果としては、西日本の「タラ」が多かった。「ト」「タラ」「バ」の使い分けは、微妙であり、そのことが予想を裏切ることにつながったのであろう。気づかない方言のことで、付け加えれば、同じ仲間原因・理由の「ケン」があるが、これは日本語教育では、でてこない単語であるため、福岡でどの年層もよく使用するにもかかわらず、留学生には使用されていない。

逆に、方向を示す「へ」は予想通りであった。日本人の場合、東京の中・老年層では「右へ曲がる」との使用がなされているが、その以外の地域では、年層を問わず、「へ（エ）」は使用されず、ほとんどすべてが「ニ」を使用している。ところが留学生は、「ニ」も出てくるが、「へ（エ）」が3名によく使用されている。これは日本語教育によるものであろう。

また、留学生によく見られる表現として、「右側に曲がって」という、「側」の使用がある。日本人ならば「右に曲がって」となるべきところである。これも日本語教育の影響ではないかと考えられる。

この他、助詞の使い方では、そう誤りは多くなかったが、助詞を抜かして表現する場合も見られ(右, 曲がって等), 十分に使いこなせているかははっ

きりわからなかった。一部の1年生には助詞使用の誤りで、「左を曲がって」という誤用がみられた。

## 6. まとめ

「道教え談話」を使用することで、単に文のみならず、大きなかたまり、構造として、留学生の言葉と日本人の言葉の比較ができたのではないかと考えている。単なる非文のことだけではなく、どう表現していくかの面からも検討を加えた。

そのことで、気が付きにくい違いや、方言を日本語教育に取り込んでいくべき必要性も指摘できたのではないかと考えている。

今回の調査に協力して下さった話者の方をはじめ、関係した方々に感謝しつつ、今後、引き続き、残された問題に取り組んでいきたい。

## 留学生の談話資料

聞いた通りに文字起こししたが、詰まったり考えていたりしたため、間があくことがあった。その間については示していない。

話者を番号で示し、その次に話者情報を示す。順に、出身国・学年・来日時期・来日時の居住地である。

### ① 中国 4年生 1999 福岡

疎) アー アノデスネ ココカラ マッサグイッテ アノー イチバンメノ  
カドオ ヒダリニマガッテクダサイ ソシタラ アノー ミギガワニ ユー  
ビンキョクガ ミエマス アー ユービンキョクガ ミエタラ ミギニ マ  
ガッテ マガッテクダサイ ソノママススダラ アノー ミギガワ  
ニ コーバンガ ミエマス ヒダリガワワ コーエンガ ミエマス ソノマ  
マ コーバント コーエンノ ナカミチオ マッサグイッタラ マエニ デ

パートガミエマス ソコデ ミギニマガッテクダサイ マッサグイッタ  
ラ エキガミエマス

親) ンー ココカラ マッサグイッテネ ヒダリガワニ マガッテ マガッ  
タラ ユービンキョクガミエル ソー ユービンキョクガミエタ  
ラー ンー ユービンキョクノホーニ ミギニマガッテ ソシタラ マッサ  
グソノママイッタラ マエニ コーバンガ ミエル コーバンガミエタ  
ラ ソノママ コーバンニソッテ マエニススンデ ソシタラ ンー マエ  
ノホウニデパートガミエルヨ デパートガミエタラ ンー ミギニマガッ  
テ デ マッサグイッタラ エキガミエル

② 韓国 4年生 2000 福岡

疎) ンー ギンコーノマエデー アノー ギンコーノマッサグイッタ  
ラー イチバンメノドーローデ アノ ミギ ヒダリガワニマガッテ マッ  
スグイッタラ コーエンガミエマス アノ コーエン コーエンガワデ ア  
ノー ヒダリガワ ア ミギガワニ マタ マガッタラ アノ ユウビン  
キョクガミエマスネ ソノ ユビンキョクノトナリワ コーバンガミエマ  
ス デ ソノアノー コーエントコーバン ユウビンキョクノ マンナカミ  
チオ マッサグ イッタラ アノ コーバンのトナリニ デパートガミエ  
マス ソノデパートト コーバンの マンナカノ オオミチ ア オオドオ  
リマンナカオトオッテ マッサグイッタラ エキガミエマス

親) ンー サイショネ アノ ギンコーカラ アノー ンー ギンコーカ  
ラ マッサグイッタラ イチバンメノ トーリデー ヒダリガワニマガッ  
タラー マガッテ マッサグイッタラー コーエンガミエルネ コーエンノマ  
エデー アノー コーエンガワソッテマッサグイッタラー アノ コーエン  
トナリニ コーバント アノ ユービンキョクガミエルカラー トリアエ  
ズ アノ コーエンガワオ ソッテ マッサグイッタラ アノ コーバンの  
ツギニ デパートガアルネ デパートトコーバンのナカニ オードーリガア  
ルカラ ソコオ マッサグイッタラ ツキアタリニエキガアル



③ 中国 1年生 2001 福岡

疎) ココカラー マッサグイッテ ギンコノトコロデー ヒダリエマガッテ  
クダサイ スー ソコデ マッサグイッタラ コーエンノトーリデ マッサ  
グイッテ デパートガアリマス ソノ デパートトコーバンノアイダ  
デ マッサグイッタラ スグエキデス

親) ココカラー エーット ヒダリエマガッテクダサイ ソー ソノマエニ  
イ ナンカ コーエンガアッテー コーエンノトーリデ ミギガワニマッサ  
グイッタラ デパートトコーバンガ ミエルンデスヨ ソコ ソノアイダ  
デ マッサグイッタラ スグエキデス

④ 中国 3年生 2001 長崎

疎) ア ギンコーカラ ヒダリマガッテー アノ ユービンキョ  
クー ンー ヒダリマガッテ ユービンキョクガアッテー ソノトーリ ア  
ノー ヒダリ ズット マッサグイッテー デパートトコーバンノ アイダ  
ノドーロオトオッテー スグエキデス

親) ンー エトー ンー ギンコノトコロ ヒダリマガッテエー ンー イッ  
ポンミチデ ンー イッポンミチ ズット ヒダリガワ マッサグイッテー  
ソノ デパートトコーバンノアイダ スグミエルトコロガエキデス

⑤ 中国 1年生 2001 福岡

疎) ハイ マズ ヒダリニマガッテクダサイ マッサグイッタラ ユウビン  
キョクガミエマス アノ ミギガワニ デ チョード マエニススンダ  
ラ コーバンガミエマス コーバンノマエ デパートガミエマス デパート  
トコーバンノナカニ アノ デパートトコーバンノ ナカノ アノ ドーロ  
ニマッサグイッテ ツキアタリニ エキガミエマス

親) マ ヒダリニマガッテクダサイ デ マッサグイッタラ ユービンキョ  
クトコーバンガ ミ ミギガワニアルトオモイマス チョットマエニススン  
ダラ アノ デパートガミエルトオモイマス デパートマデイカズニ ア

ノー コーバントデパートノマンナカノ ドーロオマッスグ アノ ミタ  
ラ エキガミエルトオモイマス

⑥ 中国 1年生 2001 福岡

疎) ハイ マズワー ギンコーノマエノー イリグチノヒダリガワニマガッ  
ター ユービンキョクオトオッテ マダアノ ヒダリガワニマガッ  
ター アノー モーチョットイッテ コーバントー アパトノナカノ ア  
イダノ ミチニ ヒダリガワノミチニマガッテ アノ チョットイッ  
ター スグエキガミエマス

親) ハイ ギンコーノマエノー イリグチノヒダリガワニマガッテ ユー  
ビンキョクオトオッテ コーバントー コーバンガミエルトオモイマ  
ス アトワー モーチョットイッテ コーバンマエノーミギガワノ イリ  
グチニマガッテ スグエキガミエマス

⑦ 中国 1年生 2001 福岡

疎) ア ハイ ココカラ マッスグイッテエー アトデ ヒダリオマワシ  
テ マッスグイッタラ ユビンキョクガアリマス ソコデ ミギオマワシ  
テ オーキードーリオソッテ イテクダサイ サンプンアルイテ コーバン  
ト デパートガミエマス デパートトコーバンノ アイダノミチオソッ  
テ マスグイッタラ エキニツキマス

親) ハイ アノー ココカラマッスグイッテ スグ ヒダリオマワシ  
テ ユビンキョクガアリマス ココデ ミギオマワシテ コーエンノソトオ  
ソッテ アルイテクダサイ サンプングライオアルイテ デパートトコーバ  
ンガアリマス ソノ アイダノミチオソッテ スグエキニツキマス

⑧ 中国 1年生 2001 福岡

疎) ハイ イマワ ギンコノマエニイマス ギンコノヒダ ギンコカラ ヒ  
ダリエマガッテ ミギ ミギワユウビンキョクーミエマス ユウビン マッ

留学生の「道教え談話」にみる表現（二階堂）

スグイッター アトカラ ヒダリエマガッテ コーバンオミエルトオモイマス コーバンノムコワ アパートガアリマス アパートト コーバンノアイダ オーキナミチガアリマス マッサグイッター エキオミエルトオモイマス

親) イマワー ギンコノマエニイマス ギンコカラ ヒダリエマガッテ マッサグイッター ユウビンキョクオミユル ユウビンキョクカラ マッサグイッテ ヒタリエマガッテ コーバンガアリマス コーバントアパートノアイダ オーキナミチガアリマス マッサグイッター エキオミユルトオモイマス

⑨ 中国 1年生 2001 福岡

疎) ココカラ アノー マッサグイッテ コーサテンガアリマス ソシテ ヒダリニマガッテ エー マーッサグイッテ コーエンガミエマス エー ミギワ ユービンキョクガアリマス ンー ツキアタリデ ミギニマガッテ エー コーエンニソッテ エー マッサ アノ コーエンニソッテ イテクダサイ エットアノー コウサ コーバンガ ミエマス エーソット ソシテ デパートト コーバンノアイダノミチガアリマス マーッサグイッテ エキガミエマス

⑩ 中国 1年生 2001 福岡

疎) ハイ エットー エキ イマ イマワアノー コノギンコーノ スグテマエノコーサテンカラ ヒダリ ヒダリオマガッテ ソシ マッサ ヒダリエマガッテ マッサグイッテ アノー スグ コーエンガミエマス ソシテアノー コーエンノホー チョット エンガワニナッテ チョットソノミチワ チョット マガッテイルンデスケド アノ ソノ コーエンノマエノミチオ ミチニソッテ マッサグイッテ コノアノー エット ミギガワガ ユービンキョクガアリマスノデ ソノ エンガワノ チョット エン マガッテルー ミチオ マッサグイッテ アノー スグミギガワ

ガ コーバンガアリマス ソノー ソノコーバンガ ミエルトコロ マタ  
マースグイッテ ソシテ アノー ミギガワエマガッテ ミギガワ ミギエ  
マガッテ アノー ソノオキナミチアリマス ソノオーキナミチワ ア  
ノー ヒダリガ デパートガアッテ ミギガワワ コーバンニアリマス ア  
ノー ツマリコノ オーキナミチワ デパートトコーバンノアイタニアリマ  
ス ソノミチ オキナミチオ ソノオキナミチカラ マスグイッタラエキニ  
ツキマス

⑪ 中国 1年生 2001 福岡

疎) ギンコーカラ ギンコーノトコロ ヒダリオマガッテ デ ユービ  
ン ユービンキョクオトーッテ ユービンキョクカラ マスグイッ  
テ コーバンミエマス コーバンノトコロカラ ミギオマガッテ ツキアタ  
リ エキガミエマス

⑫ 中国 1年生 2001 福岡

疎) イマノトコカラ ヒダリニマガッテ アルイタラ コーエンガミエマ  
ス コーエンオソッテー アルイタラミギガワニー コーバンガアリマ  
ス コーバンノトコロカラー アノ ミギニマガッタラー ツキアタリ  
ニ エキガミエマス

親) ギンコカラ アノ イマノトコロカラー ヒダリニマガッタラ コーエ  
ンガミエルヨ コーエンオソッテー アルイタラ コーバンガアルトオモ  
ウ コーバンノ ミギカドマガッタラ エキガアル

⑬ 中国 1年生 2001 福岡

疎) エー マズギンコーガアリマス ギンコノムコーガワ ユービンキョクガ  
アッテー ヒダリガマワッテー コーエンガアリマス コーエンノムコー  
ガ コーバンガアリマス ソノミチガー マスグイッテー エ コーバン  
トデパートノ アイダノミチガマスグイッテ エキガミエマス

留学生の「道教え談話」にみる表現（二階堂）

親) ンー マズ ギンコーカラア ヒダリニマワッテー ユービンキョクガ  
ミエマス ユビンキョクノ ユービンキョクノーミチカラ ヒダリニマガッ  
テ コーバンガアッテ コーバンノトコガ ミギニマワッテ マッサグイッ  
テ エキガミエマス

⑭ 中国 1年生 2001 福岡

疎) イマノトコロカラー スコシイクト コサテンアリマス コーサテンノ  
ミギガワノマガッテ モ マッサグイクト ユービンキョクガミエマ  
ス ユービンキョクノガワ シバ シバラクイクト コバンガミエマス コ  
バン コバンガミエマス ンー コーバンノー ヒダリマガッテー アタ  
リ エキガミエマス

⑮ 中国 1年生 2001 福岡

疎) コノマエノコーサテンカラ ヒダリニマガッテ マッサグイッテ ツキ  
アタリニユビンキョクガアリマス ソコデミギニマガッテ スコシアルイテ  
イッタラ コーバンガアリマス コーバンノトコロカラ コーバンノトコロ  
デ ヒダリニマガッテ マッサグイッテ デパートガアリマス デパートト  
コーバンノハサンデルミチオ ミギニマガッテ マッサグイッタラ ツキア  
タリニエキガアリマス

親) コノマエノコーサテンカラ アノ ヒダリニマガッテ マッサグイッ  
テ ツキアタリニ アノー コーバンガアリマス コーバンノトコロデ ミ  
ギニマガッテー マッサグイッテー コーバンノトコロデ マダミギ ヒダ  
リニマガッテ マッサグイッタラ デ デパートガアルヤン デパートノト  
コロデ マッサグイッテ ズットツキアタリニエキガアリマス

## 参考文献

- 久木田恵 1990 「東京方言の談話展開の方法」(『国語学』162)
- 陣内正敬 1993 「西日本方言の変容と関西方言」(『方言の現在』明治書院)
- 陣内正敬・坪内佐智世 1995 「地元意識と開放性の共存する都市方言」(『言語』24(12)  
大修館書店)
- 村上恵 1996 「道順説明の構成要素と表現類型」(『三重大学 日本語学文学』7)
- 陣内正敬 1997 「「道教え」談話にみる九州4都市方言の変容」(科研報告書『西日本に  
おけるネオ方言の実態に関する調査研究』)
- 田原広史・村中淑子 1999 『東大阪市における方言の世代差に関する調査研究』(東大  
阪市)
- 陣内正敬 2001 「談話における敬意表現の社会的多様性」(『談話のポライトネス』国立  
国語研究所編 凡人社)
- 二階堂整 2003 「福岡道教え談話に見る世代差」(科研報告書1『コミュニケーション  
の地域性と関西方言の影響力についての広域的研究』)